



### 使徒の働き 1:-28:

2017.8.2

ルカ-使徒行伝 神の国 = 世の救い = 25万人 + 異邦人 = キリスト人. 救済が全世界に.  
なぜルカが書いたのか? (聖霊の種が実を結ぶ) キリストのからだ. 聖霊の宮.

	マタイ	マルコ	ルカ	ヨハネ	使徒行伝
聖霊 40+4151	8	7	<u>20</u>	7	<u>48</u>
神の国. 天の御国	<u>5+32</u>	14	<u>33</u>	2	6
証言. 証人. 3144. 3140	2+1	1	1+2	<u>31</u>	<u>13+12</u>
立つ. 立ち上がる (おぼろげ)	6	18	<u>27</u>	8	<u>44</u>
帰る 5290	-	1	<u>21</u>	-	<u>11</u>
悔い改める 3340. 3341	5+3	2+2	9+5	-	5+6
信仰. 信じる 4102. 4100	8+9	5+14	11+9	- <u>86</u>	<u>15+36</u>

使 1:3 神の国を語り、復活の証拠を示すこと。  
 使 28:23 神の国を告げし。モセ律法+預言にふたはせし。  
 使 28:31 神の国を宣べ伝え。主イエスキリストを告げし。

ルカ2: 25万人 イスラエル人の 25万人. 25万人の救済  
 ルカ24:31 イスラエルの救済が全世界に  
 1:6 イスラエル国を再建?

→ 永遠のいのちの泉が全世界に (聖霊)

ルカ福音書と使徒行伝。使徒行伝もルカが書きましたので、ルカ文学と呼ばれたりします。ルカ福音書と使徒行伝を合わせると、新約聖書の中で一番長いものになりますので、実は長さで言うとルカが一番です。どうして使徒行伝をルカが書いたものと言えるのか。マルコ福音書に続いて使徒行伝があってもいいし、ヨハネ福音書に続いてヨハネが使徒行伝を書いてもいいわけですね。なぜこのルカ福音書に続いて使徒行伝が書いてあるのかということを探ってみました。

ルカと使徒行伝に共通している多い言葉というのが「聖霊」。「聖霊」はルカに20回。使徒行伝に48回。それと「立ち上がる」。よみがえる時も立ち上がるとか、立つという言葉を使うのですけれども、立つも立ち上がるも、よみがえるという意味も合わせて見ると27回(ルカ)と44回(使徒)。行ったり、帰ったりする「帰ってくる」。神の家に帰るといようなテーマが21回(ルカ)と11回(使徒)。悔い改めるもまあまあ多い方です。「信じる」という言葉と「証人、証言」。これはヨハネに多いですね。ヨハネに圧倒的に多い「証人、証言」。これがヨハネ(31回)と使徒行伝(13+12)に多い。「信仰、信じる」もヨハネが86回です。それと使徒行伝(15+36)にも多いということで、ルカと繋がっているところが「聖霊、帰ること、復活すること」という感じです。それと気がつくところが「神の国、天の御国」使徒行伝ではどこかに消えちゃうのですね。あまり言われなくなります。マタイとルカには圧倒的に多い。使徒行伝では消えてしまっている。この辺からルカと使徒行伝とのつながりというのをもう少し見ることができるだろうと

ということで、この表に書いてあります。「聖霊、立つ、復活する、帰る」は使徒行伝とルカ。「証言する、信じる」はヨハネと繋がっているということです。

その中で使徒行伝は、ヨハネではなくてルカだということですが、ルカの大きな全体を通して見ているテーマは永遠のいのちが与えられるということ。「神様から永遠のいのちをいただける民は誰ですか」「清められる民、聖なる民というのは誰なのか」ということがルカのテーマになっています。聖霊が与えられる、永遠のいのちが与えられるということがテーマですので、ルカでは「聖霊」という言葉からそれがわかるということですね。

ヨハネ福音書は、その永遠のいのちを与えるものはキリストです。ヨハネは与える側です。そのイエスの復活によって与えられる永遠のいのちという話なので、ヨハネは与える側。その与える側を信じなさいということをお話でしています。ですからルカはその聖霊を受ける側。清められる側(ルカ)と、清める側(ヨハネ)。

清められた者たち(ルカ)は、どうなっていたか(使徒行伝)。聖霊によって導かれている聖霊行伝ですね。使徒を通して聖霊が働いている聖霊行田、その撒かれた種がどう実を結んでいっているのかということが使徒行伝のテーマになりますので、ルカが続けて書いているのでしょう。

先ほど説明した神の国の話が消えたかのような感じはしますが、使徒行伝の最初1章3節で、イエス様は40日間弟子たちと一緒にいて神の国についてを語り、復活の証しをされました。そして使徒行伝の終わりのところで、パウロは何をしたかということが最後に2回書いてあります。神の国を証してモーセの律法と預言者によって書かれている。これは復活のことですね。復活のことを証言した。神の国を宣べ伝えて主イエスキリストを教えた。これがパウロがしていたことです。ここに「神の国、神の国」があるのですが、間にはほとんど出てこない。

じゃあ神の国とは何ですかということですが、ルカの出だし2章にシメオンとアンナという預言者が出てきますね。そこでシメオンはイスラエルが慰められる望みをもって待っている。アンナもエルサレムが贖われることを待っている。そして、ルカの終わりで、「イスラエルの贖いを待っていたのにイエス様は消えてしまった」という箇所が、ルカ24章21節の話にあって、「そんなことはない、モーセの律法と預言書に書いてあることは必ず成就すると言ったじゃないですか」というところで終わっていくわけですね。

神の国を語って復活の証拠を示された使徒行伝1章3節のところを証言すると、「イスラエルの国をいよいよ再建されるのですか」というふうに質問するところがあります。このイスラエルの国が贖われて新しい国が作られる。これはどういうことなのかということが、特に使徒行伝を見ると分かると思います。神の国というのは全世界が救われるということ。今までは、アブラハム、イサク、ヤコブへの神様の約束が、ユダヤ人を通して広がっていくというものでしたけれども、ユダヤ人も異邦人も含まれて、キリスト人の教会、ユダヤ人じゃなくて、異邦人でもなくて。キリスト人クリスチャンの教会が全世界に広がる。キリストのからだが増えてあげられる。聖霊の宮が築かれる、全世界が。聖霊の種が実を結ぶ。これが神の国ということですので、その聖霊の働き、復活したよという復活の証言、その復活によって聖霊が降ったよという教会の始まり、教会の生まれについて、使徒行伝で書かれています。ですから、この永遠の命が与えられる。その民はエルサレムへと帰ってくる。神様の家に帰ってきたというエルサレムから始まって、全世界に広がっていく使徒行伝ということで、ルカが続けて使徒行伝も担当したということなのだろうと思います。